

Carbin, Maria and Sara Edenheim, 2013, "The Intersectional Turn in Feminist Theory: A Dream of a Common Language?" *European Journal of Women's Studies*, 20(3): 233-248.

マリア・カービン／サラ・エデンハイム, 2013, 「フェミニスト理論における交差的転回—共通言語への夢?」

※ () の数字はページ数を表す。

レジュメ作成者による紹介文

Maria Carbin はスウェーデンのウメオ大学社会科学部教授、Umeå Centre for Gender Studies (UCGS) 教授で、マルクス主義フェミニズム的な反資本主義闘争、ジェンダーに基づく暴力などの論考がある。Sara Edenheim は同大学歴史学准教授、UCGS 上級講師で、フェミニスト理論・批判的政策分析をしている。

本論文は、フェミニズム理論における交差的転回が、いかにして成功したのかが分析されている。筆者たちは、フェミニズム理論における交差性の広範な取り込みが、この分野における議論を曖昧にする可能性を指摘している。

1. 導入 (1-2)

- この 10 年間、ヨーロッパや北米のジェンダー研究において、交差性 intersectionality という概念の使用が爆発的に増加してきた。
 - 交差性という概念は、ジェンダー研究においてますます制度化され、大学院や学部のコースにおける標準的なトピックとなってきた。
 - この論文では、フェミニスト研究においてこの概念への傾倒が高まっていることを検証し、議論することを試みる。わたしたちは、交差性がいかにしてこれほどのサクセスストーリーとなったのか、そしてなぜこの概念が、この特定の時期にフェミニストの理論化において「優れた研究」を示す記号として発展したのかを検証する。
- 本稿の目的は、この概念が(白人)フェミニズムに対する脅威と対立のしるしから、リベラルで「すべてを包摂する」フェミニズムの制度化を可能にした合意形成 consensus-creating のしるしへと変化したことを示すことである。
 - まず、交差性概念の発展について簡単に紹介し、この概念自体が含意する存在論を明らかにしてから、交差性において宣言された約束を分析的に読み解く。

2. 交差性の始まり (3)

- 学者の多くは、交差性研究の出発点を 1980 年代後半と位置づける。また交差性に関するほとんどすべての論考は、アメリカの弁護士 Kimberlé Crenshaw に言及している。

- ・ Crenshaw の主要な論点は、白人フェミニストたちが、白人の中産階級のアジェンダを設定することによって、いかに黒人女性をフェミニズム運動から排除してきたか、また同時に、黒人女性が男性の偏見によって反人種主義運動のなかでいかに十分に認識されていなかったかを示すことであった。
- ・ Patricia Hill Collins は、特に国家と家族に関する著作においてこの用語を最初に取りあげた一人である (Collins, 1998)。
- ・ Crenshaw も Collins もアメリカのラディカルなブラック・フェミニスト批評の影響を受け、権力構造の異なる部分が相互作用することのメタファーとして交差性を用いており、彼女たちの議論は、構造主義的存在論の理論的設定に適合していた¹。

3. 交差性の拡大 (3-6)

- ・ この概念の構造主義的な起源にもかかわらず、交差性は今日、(構造主義、リベラル、ポスト構造主義を問わず) すべてのフェミニズムのためのプラットフォームとなり、また共通基盤として分節化されている。
 - ・ Ann Phoenix と Pamela Pattynama が指摘するように、交差性は「あらゆる状況に対応可能なフレーズ catch-all phrase」になっている (Phoenix and Pattynama, 2006: 187)。しかし、その人気の高まりや「すべてを包摂する」性質は、具体性や明確な制限によってではなく、理論的な曖昧さによって保証されている (Knapp, 2005)。
 - ・ わたしたちは、まさにこの共通言語の夢、つまりこの包摂と目に見えない排除こそが、分析を必要とするものだと信じている。
 - ・ そこで本稿は、フェミニスト研究において、なぜこの時期に交差性概念の拡大が起こったのか、そしていかにしてあらゆる種類のフェミニズムが、交差性の分野に包摂されるようになったのか議論したい。

4. 複雑性の約束 (6-7)

- ・ わたしたちは、交差性の議論において繰り返されるいくつかの中心的テーマを見出すことができた。
 - ・ 交差性は、「社会生活における複雑さ」を捉え、「マルチレベル・モデル」を提供する可能性を持つと提示されている。Leslie McCall によれば、すべての交差的なアプローチは「複雑さへの要求を満たそうとする」ものであり、「社会生活における交差性の複雑さを探究する」(McCall, 2005: 1773)。

¹ 構造主義は、社会構造のありようを探究する思想であり、人間の言動は自分が属する習慣や文化 (社会構造) によって無意識的に規定されると考える (田中・香月 2019: 158)。Ferdinand de Saussure、Claude Lévi-Strauss、Jacques-Marie-Émile Lacan、Louis Pierre Althusser などが代表論者として挙げられる。

- ◇ 交差性は、アカデミックなフェミニズムと政治的なフェミニズムの両方において、一元的で排他的なアプローチ (=分析においてジェンダーのみに着目する仕方) を克服する方法を提供すると考えられている (Hancock, 2007b: 67)
- しかし、Gressgård (2008) が指摘するように、このような複雑性の探究は、世界の地図を正確に描こうとする実証主義的な研究アジェンダに接近する。
 - ・ それゆえ、「わたしたちは複雑なシステムについて完全な知識を得ることはできず、特定の枠組みからしか知識を得ることができない」 (Gressgård, 2008: 5) というポスト構造主義のテーゼを無視することになる。
 - ・ Gressgård の読解では、交差性に関する文献における複雑性 (complexity) の捉え方は、実証主義者のアプローチと密接に関連している。ここでの複雑性が意味する状況とは、「情報が不完全なために、その振る舞いを予測する作業が困難を呈するとき・・・しかし、原理的には、単純で根源的なモデルを拡大することによって、それを説明し理解することが可能なとき」 (Greco, quoted in Gressgård, 2008: 9) とされる。
 - ◇ 交差性研究者は、「より差異に敏感で洗練された図式が、表象の危機やカテゴリー化の問題を一挙に解決できる」 (Gressgård, 2008: 5) と考えながら、分析におけるカテゴリーを追加しているのかもしれない。

5. 批判的であるという約束 (7-8)

- 交差性の特集号や会合、アンソロジーは、内部からの批判的な声を提供することを約束する。
 - ・ しかし、たとえば Celebrating Intersectionality? という会合の登壇者リストには、交差性に反対する論者として知られる研究者は見られず、登壇者たちはみなこの概念の有用性を主張する。そのため、交差的な分析を行うべきか否かについては議論されず、どのように行うべきかについて意見が交換される。
- 筆者たちが調べた論文や本において、交差性に対して批判的な見解を示しているものは 3 つしかなかった (Carbin and Tornhill, 2004; Egeland and Gressgård, 2007; Gressgård, 2008)。
- また交差性の議論において、カテゴリーや理論の幅を拡大することについての議論や、存在論、エイジェンシー、権力、抵抗といった重要な概念に関する議論も、同様に欠如していることが見てとれる。
 - ・ このような議論や論争は、研究者自身をこの分野の内部／外部に位置づけたり、あるいは (内部や外部から) 肯定的／否定的に位置づけたりする可能性を提示するのだから、重要である。

- ・ わたしたちは交差性の約束を探究する中で、そのような論争を見つけることができなかったの、代わりに対立の痕跡を探し、存在論的・理論的問題や差異に関する議論の欠如について分析することを余儀なくされた。

6. 分断を乗り越えるという約束 (9)

- 構造主義フェミニズムとポスト構造主義フェミニズム、黒人フェミニストと白人フェミニスト、ポストコロニアル・フェミニズムと西洋フェミニズムの間の対立に関しては、筆者たちが分析したほとんど全てのテキストにおいて、そのような紛争の亡霊的痕跡が見られた。
 - ・ しかしほとんどの場合、これらの論争は、対立として表されるのではなく、「差異」、「分断」、「異なる系譜」、「異なるバージョン」、「視点」、そして「親戚関係」として表現されており、まるでそれらが交差的なフェミニズムという一つの実体に結びつけられ、「結合される」かのように見なされる。
 - ・ ここで「対立 conflicts」を「分断 division」と呼ぶことは無邪気な同義語ではなく、そのような表現は、橋渡しというメタファーを提供する。すなわち、ここで交差性は、フェミニストが分断を乗り越えるための架け橋となっている。
- 交差性は、まさにフェミニズムの結節点 nodal point となることで、二つの分析レベル——例えば「構造主義的なアプローチと構築主義的なアプローチ」、「構造と主体」、「言説・制度的形式のレトリックと声／存在のレトリック」——を結びつけ、フェミニズム内部の分断を克服することになる。
 - ・ しかしここでは、ポスト構造主義の議論の成果が無視されている。
 - ・ ポスト構造主義は構造主義における構造とエイジェンシーの二元論を疑問視し、それを克服するために主体化 subjectification の理論を提唱した。
 - ・ 交差性の議論においては、「構造」が「言説」と、「主体」が「声」と同義であるかのように枠づけられているが、これは、構造 vs エイジェンシー、権力 vs 自由という構造主義的な議論を援用することによって初めて可能になる。
 - ・ 交差性は、象徴と表象しか扱わないはずのポスト構造主義と、「具体的な」個人の「声をとらえる」ことに苦心する構造主義の間の問題を定式化するために、構造主義の用語を流用した。つまり、交差性の登場によって、ポスト構造主義が大昔に指摘した問題（構造 vs エイジェンシーという議論の枠組みは機能しない）が乗っ取られており、逆説的にも、ポスト構造主義がこの問題に取り組んでこなかったと批判される結果となった。

7. ポスト構造主義フェミニズムという亡霊 (10-11)

- 1990年代後半、アカデミックなフェミニズムは差異とアイデンティティをめぐる議論に疲弊していた。

- Robyn Wiegman によると、「アカデミック・フェミニズムは、『差異』の内部力学に深く苛まれ、女性たちの互いに対する共約不可能性が、フェミニズムの終末論を語る最も強力な力の一つとなっていた」(Wiegman, 2000: 808)。
 - Wiegman に倣って言えば、(一貫性を保持するような)自己同一的なフェミニズムは、危機的な状態にあったと言えるかもしれない。そこでは、時を超えて自己同一的であることを要求するフェミニスト主体のモデルが再生産された (Wiegman, 2000: 809)。
 - 1990 年代後半は、生物学的で本質主義的な存在論を回避するために、ジェンダーの概念を導入しようと苦心していたフェミニストにとって、混乱した時期であったと言えるだろう。このように、交差性が導入された当時、フェミニズムはポスト構造主義という名の未来の亡霊に取り憑かれていたのではないだろうか。この亡霊は、自己同一的なフェミニズムを救う方法として交差性に門戸を開いたのである。
- 交差性研究において定義されるポスト構造主義は、差異や複雑さといった概念を前面に押し出す視点として使われており、それゆえ、交差する権力や経験の複雑性を捉えるためにもポスト構造主義を導入する必要があると考えられているのかもしれない。
 - しかし交差性の議論においては、ポスト構造主義の基本的な前提——世界を正確に表象することが根本的に不可能であること——は共有されていない。

8. ブラックフェミニズムという亡霊 (11-13)

- しかし、おそらく交差性の成功は、ポスト構造主義に起因する不安に由来しているだけではない。Gudrun Axeli Knapp が指摘するように、2000 年代の初めには、「ジェンダーの社会的な関連性の低下とフェミニズム理論の危機」(Knapp, 2005: 256) への恐れが高まっていた。
 - ジェンダーは、多文化主義や人種／民族主義によって影が薄くなるという噂があった (Lykke, 2003)。
- このようにジェンダー研究やフェミニスト理論が消滅するリスクは、潜在的な脅威としてみなされてきた。この状況は、2000 年代初頭にヨーロッパのフェミニズムを悩ませたもうひとつの亡霊、すなわちブラック・フェミニズムの亡霊を生み出す終末論的脅威を表している。
 - ブラック・フェミニズムに触発されたフェミニストたちは、人種やエスニシティ、移民に関する議論を扱うことのできない白人中心のフェミニズムを批判した。
 - ヨーロッパ的な白人フェミニズムは、交差性を分析に含めることで、ブラック・フェミニズムからの批判に応答しようとした。しかしここでの交差性に関する議論は、ブラック・フェミニズムが当初提起してきたようなラディカルな批判力を欠くものであった。

- ◇ たとえば、白人フェミニストの Kathy Davis の議論において、交差性研究に対するブラック・フェミニズムの貢献は、日常的に「ジェンダー、階級、人種間の関係を理論化する」ことと定義されている (Davis, 2008: 70)。ここで、ブラック・フェミニズムの中心的な政治的目的のひとつである、フェミニズムのなかの階層的で問題含みの関係を可視化することが抹消されていることがわかる。
- 交差性は、私たち全員がジェンダー、階級、エスニシティ、セクシュアリティなどについて、対立や気まずさ、罪悪感を置き去りにして話すことができる共通の場を約束した。まるで、交差性という言葉が、差異について話すことを容易にしてくれるかのようである。
 - 交差性は、ジェンダー研究という消滅しそうな分野を救うと同時に、フェミニスト的分析を行うための進歩的な方法を提供するという夢物語を可能にしている。

9. 結論 (13)

- 今日、交差性はもはや単なるメタファーではない。それはフェミニスト理論として提示されている。しかし本稿で示されたように、交差性は一貫した存在論を有していない。
 - 交差性が成功したのは、存在論の一貫性という理論の要件を満たしていないからであり、それゆえ「誰もが」「研究のやり方」に適合していると感じているのである。
- ちょうど、リベラリズムが、誰も反対できないような一般化された価値 (民主主義、平等、自由、人権など) を信奉することによって批判を封じ込めるように、すべてのフェミニストは「社会的立場が交差する」、「カテゴリーは絡み合う」、「権力関係は複雑である」といった文言に同意している。
 - リベラリズムが自らを非政治的であるかのように装うのと同様に、このような交差性の文言は、対立が不可能となるような言説へとフェミニストを誘う。
 - 批判的概念として意図され、ブラック・フェミニストによる重要な介入から派生した交差性は、存在論の欠如によって成功してきた。この欠如は、場合によっては、ブラック・フェミニストの構造主義的存在論の衰退を招いたが、同時に、フェミニストの共通言語という夢を共有しないポスト構造主義的存在論の非正当化も招いたのであった。

【参考文献】

田中正人編著・香月孝史著, 2019, 『社会学用語図鑑』プレジデント社.